ニーチェと永遠回帰

井ノ川　清

はじめに

「お前が現に生き，また生きてきたこの人生を，いま一度，いなさらに無数度にわたって，お前は生きねばならぬであろう。そこに新たな何ものもなく，あらゆる苦痛とあらゆる快楽，あらゆる思想と嘆息，お前の人生の言いつくせぬ巨細のことども一切が，お前の身に回帰しなければならぬ。しかも何から何までことごとく同じ順序と脈絡にしたがって，――さればこの蜘蛛も，樹間のこの月光も，この自己自身も，同じように回帰せねばならぬ。存在の永遠の砂時計は，くりかえしくりかえし巻き戻される――それとともに塵の塵であるお前も同じく！」（「悦ばしき知識」341番）

この言説を読むものはどのような感じを抱くであろうか。おそらく大多数のものは，極度のペシミズム，言いようのない絶望感を感じとるであろう。この言説はニーチェの言説の中で「永遠回帰」の思想が最初に明確な形で表われた言説として極めて有名なものである。ここには永遠回帰の不気味な，望ましくない，誰もができるなら避けたいと思うような面が表明されている。ニーチェにとって「永遠回帰」は先ず出発点としてはニヒリズムの絶頂として把握されたのである。

次にここでもうひとつのニーチェの「永遠回帰」の思想が表明されている言説をみてみよう。

「悦楽が欲するのは自分自身だ，永遠だ，回帰だ，万物の永遠にわたる自己同一だ。」（「ツァラトゥストラ」『酔歌』9節）

「すべてのことは，鎖によって，糸によって，愛によってつなぎあわされているのだ。——おまえたちがかつて「一度」を二度欲したことがあるなら，かつて『おまえはわたしの気に入った。幸福よ，刹那よ瞬間よ』と言ったことがあるなら，それならおまえたちはいっさいのことの回帰を欲したのだ。……すべての悦楽は——永遠を欲するからだ。」（「ツァラトゥストラ」『酔歌』10節）

この言説は「永遠回帰」の極度の理想的状態，われわれの心にとっての安心立命の境地，めざすべき目標といったものを表明している。この言説は「ツァラトゥストラ」の文字どおりの最終局面に在る。従ってニチェーにとっても「ツァラトゥストラ」をしめくくる極めて重要な言説であるにちがいない。

「ツァラトゥストラ」という作品は，ある面からみれば「永遠回帰」の思想が次第に形成されていくのを追求していった作品だといえるであろう。ここではニーチェが「永遠回帰」思想を肯定的なものとして把握したことは明白であると思われる。

では以上のように「悦ばしき知識」における言説と「ツァラトゥストラ」における言説との「永遠回帰」のこの二面性，このへだたりはどのように説明されるのであろうか？　この二つの言説に関連はあるのか？　統一的解釈は可能なのか？　それとも矛盾をはらんだままの対立的言説なのだろうか？　以上の問題意識に立脚しつつ以下にニーチェにとって「永遠回帰」とは一体どのような思想だったのだろうかということの究明を試みてみよう。

一．ニヒリズムの極限的形式としての「永遠回帰」

「ツァラトゥストラ」においても「永遠回帰」思想はすべてがバラ色を呈示しているのではない。極めてペシミステイックな言説もあるのである。

「『ああ，人間が永久に立ち帰ってくる。小さい人間が永久に立ち帰ってくる。』 わたしはかつて，最大の人間と最小の人間の裸身を見た。その二つはあまりにも似かよっていた，――最大の人間さえ，あまりにも人間的だった。最大の人間もあまりに小さい。――これが人間にたいするわたしの倦怠だった。そして最小のものも永遠に回帰すること――これが生存にたいするわたしの倦怠だった。ああ，嘔気，嘔気，嘔気。」（「ツァラトゥストラ」『快癒しつつある者』2節）

「一つの教えが宣べられた。一つの信仰がそれと並んでひろまった。『一切はむなしい。一切は同じことだ。一切はすでにあったことだ』と。

そしてあらゆる丘はこだまを返した。『一切はむなしい。一切は同じことだ。一切はすでにあったことだ』と。」（「ツァラトゥストラ」『ある予言者』）

この二つの言説で分るようにニーチェにおいては「永遠回帰」思想は最初極限的ニヒリズムとして把握されている。それが次第に発展してニーチェ独自の解答となってゆくのである。

「ツァラトゥストラ」においてはニヒリズムとしての「永遠回帰」思想はペシミスティックな感情の吐露であるが「権力への意志」の中では極めて理論的に極限的ニヒリズムとしての「永遠回帰」思想が語られている。先ずニヒリズムとしての「永遠回帰」とは一言にして言うとどのようなものであろうか？

「意味や目標はないが，しかし無のうちへの終局をもたずに不可避的に回帰しつつあるところの，あるがままの生存，すなわち『永遠回帰』これがニヒリズムの極限的形式である。すなわち無（「無意味なもの」）が永遠に！」（「権力への意志」S.44）

この言説から分るようにニーチェの回帰思想はキリスト教世界観とヘーゲル哲学とを意識してこれに正面きって対抗するのである。歴史の過程に

は神の意志が実現されていくものであるし，究極的には最後の審判に向っていくものだとするキリスト教世界観と歴史は発展していって終局的には絶対理念に向って収斂していくのだとするヘーゲル哲学にニーチェは反論する。

「私たちは結末をつける目標を否認する。生存がそうしたものをもっているとすれば，それは達成されているはずであるからである。」（「権力への意志」S.44）

「世界は生成し，世界は経過しはするが，しかし世界は，けっして生成しはじめたこともなければ，けっして経過しおわったこともない。」（「権力への意志」S.694）

ではニーチェはなぜ歴史の目的論的発展的解釈を拒否するのか？　なぜニーチェは歴史の円環的解釈をとるのか？　この点に関してニーチェはその理論的根拠を述べている。

「世界を一定量の力として，また一定数の力の中心として考えることが許されるとすれば――このことから結論されるのは，世界は，その生存の大々的なさいころ遊びをつづけながらも，算定しうる一定数の結合関係を通過しなければならないということである。無限の時間のうちではあらゆる可能な結合関係がいつかはいちど達成されていたはずである。それのみではない。それらは無限回達成されていたはずである。しかも，あらゆる結合関係とその直後の回帰との間には総じてなお可能なその他すべての結合関係が経過したにちがいなく，これらの結合関係のいずれもが同一系列のうちで生ずる諸結合関係の全継起を条件ずけているのであるから，このことで，絶対的に同一な諸系列の円環運動が証明されているはずである。すなわち，それは，すでに無限にしばしば反復された，また，無限にその戯れをたわむれる円環運動としての世界にほかならない。」（「権力への意志」S.696）

ニーチェは生成の過程は無限であるとするが，世界は有限な一定量の力であるとする。従って無限の過程の中で有限な世界つまり一定数の力としての世界は無限に達成されているはずだと考えるのである。もちろんこのニーチェの見解には反論が可能である。現代人にとって生成の過程が無限であるということは容易に賛成できることであろう。しかし世界を一定量の力の諸結合状態であるとする考えは賛否両論に分れるところだろう。この前提が否定されればニーチェの永遠回帰の教説は成り立たなくなってしまう。ニーチェ自身「この世界は権力への意志である——そしてそれ以外の何ものでもない！」（「権力への意志」S.697）とも言っている。だから世界はより大きな力へ向っての絶え間のない力の自己増殖的増大運動であるとも解釈されうるのである。このことは現在の物理学的宇宙論がこの宇宙を膨張宇宙と考えていることと一致するのである。しかしこの宇宙がいつか膨張を停止し，さらには収縮に向うかもしれないということは全く分らないままである。ニーチェの「永遠回帰」思想が宇宙論的にみて正しいのか正しくないのかということは現代の物理学では断定できないことであろう。しかしこのように「永遠回帰」思想を宇宙論的に論ずることは無意味なことであろうし，実りのないものとみなければならないであろう。われわれとしては「永遠回帰」思想をあくまで人間学的存在論の次元で論ずべきであろう。

さて以上見てきた如くニヒリズムの極限的形式としての「永遠回帰」思想の理論的解明はニーチェにとって可能であったが，次に問題となるのは，一体どのようにしてこのニヒリズムとしての「永遠回帰」思想が肯定的思想になるのか，すなわち「永遠回帰」思想のニヒリズム面が克服されて人間の究極的慰め，安心立命の境地を示す肯定的思想になるのかということを考えてみよう。

二. 過去の救済

ニヒリズム克服の鍵は，すでに冒頭で引用した「悦ばしき知識」341番の後半の部分に暗示されている。最初に「永遠回帰」を告知した断片の中にすでにニヒリズム克服の鍵がひそんでいるということはまことに興味深い。この部分を引用して検討してみよう。

「――おまえは倒れ伏し，歯ぎしりして，そう語ったデーモンを呪わないだろうか？　それともおまえは，このデーモンにたいして，『お前は神だ，私はこれよりも神的なことを聞いたことはけっしてない！』と答えるようなとほうもない瞬間を以前経験したことがあるのか。もしあの思想がおまえを支配するようになれば，現在のおまえは変化し，おそらくは粉砕されるであろう。万事につけて『おまえはこのことをもう一度，また無数回におよんで，意欲するか？』と問う問いは，最大の重しとなって，おまえの行為の上にかかってくるだろう！　あるいは，この最後の永遠の確認と封印以上のなにものも要求しないためには，おまえはおまえ自身と生にどれほど好意をよせなければならないことだろう？――」

「おまえはこのことをもう一度，また無数回におよんで，意欲するか？」と問う問いがポイントになる文句である。「もう一度，また無数回におよんで」という箇所は「永遠回帰」思想をさし示す文句である。そしてこれを「意欲するか？」という問いが，このニヒリズムを克服するためには「意欲する」ということ，つまりより一般的にいって「意志」の在り方が，問題なのだということを暗示しているのである。

「汝なすべし」から「われ欲す」への転換がニヒリズム粉砕の武器となる。しかしこの「われ欲す」は絶対的に自由で万能なものなのだろうか？

「意志，それが解放し，喜びをもたらす者の名だ。そうわたしは君たちに教えた，わたしの友人たちよ。しかし，いまそれに添えてこのことを学ぶがいい。意志そのものはまだ一個の囚われ者なのである。

意志は解放者である。しかしこの解放者をも鎖につなぐ者がある。それは何であろう。『そうであった』——これが意志の切歯扼腕であり，このうえもない孤独のうちの悲しみである。意志は，すでに起ったことにたいしては無力であり，——過去の一切にたいして怒っている傍観者である。意志は，過去にあったことを意欲によって左右することはできない。……これが意志のこのうえもないさびしい憂悶である。……

時があともどりしないこと，これが意志の痛憤である。『かってこうであったもの』——それが，意志が力をふるっても，ころがすことのできない大石の名称である。」(「ツァラトゥストラ」『救済』)

意志が過去にさかのぼって意欲することができないということで人は虚無感におそわれて「一切は過ぎ去る。それゆえに一切は過ぎ去るに値するのだ。……世の事象の流れからの救済，また<生存>という罰からの救済は，どこにもない。……生存も，永遠にわたって行為であり罪責であることをくりかえさなければならぬのだ。……この循環を絶ち切る道はただ一つである。すなわち……<意欲>が<意欲せぬ>に変ることである——」(「ツァラトゥストラ」『救済』) というように慨嘆してお伽歌をうたう。<意欲>が<意欲せぬ>に変るということは，意志の無力を痛感し，「われ欲す」をあきらめる生理学的デカダンスの疲労のニヒリズムを意味している。ここに救いはない。では実際本当に意志は過去を左右することができないのであろうか？　過去の救済はどのようにしてなされるのであろうか？　起こってしまったことはどうにもしようがないのである。問題なのはこの過去の受けとめかたである。過去という大石の前で委縮し，<意欲せぬ>になってしまうということは，そのまま現在および未来に対する行為に過去が影響をおよぼすことになるのである。<意欲せぬ>という態度も，過去の現在に対する影響力の行使に力をおよぼしているという点で一つの行動なのである。それは過去にどこまでもひきずられ

ていくことであり，「歴史の必然性」といったものに完全に屈服してしまうことである。ここに突破口はないであろうか？　過去は救済されえないものなのか？　ニーチェはこの問いに対して一つの飛躍的な意志の在り方を呈示する。

「だが，わたしが君たちに『意志は創造する者だ』と教えたとき，わたしは君たちをこのお伽歌の支配のそとへ連れ出したのだ。

いっさいの『かつてそうであった』は，一つの断片であり，謎であり残酷な偶然であるにすぎない，――だが創造する意志は，ついにそれにたいして，『しかしわたしはそれがそうであったことを欲したのだ』と言うのだ。」（「ツァラトゥストラ」『救済』）

ニーチェは，過去に存在したものを救済し，つまり，いっさいの「そうであった」を「わたしはそう欲したのだ」に造り変えることによって過去の救済は実現されると考える。このニーチェの考察はたんに「現在」を「過去」のしがらみから解放するだけではない。それは未来をも左右する重要な考えである。

「――創造する意志は，ついにそれにたいして，『しかしわたくしはそれがそうであったことを，いまも欲しており，これからも欲するだろう』と言うのだ。」（「ツァラトゥストラ」『救済』）

「これからも欲するだろう」というのは，視野が未来に向って開かれていることを意味する。ではこのように過去を救済する「意志」の実体は何であろうか？　ニーチェは言う。

「意志はすなわち力への意志である。こういう意志はあらゆる和解よりも高いものを欲しなければならぬ。――しかしどうして意志がそれをするようになるであろうか？　意志に，過去へさかのぼって意欲することをも教える者は誰だろうか。」（「ツァラトゥストラ」『救済』）

このように過去を救済しうる強い意志をもった人間存在への要請にこた

えて「超人」が登場してくるのである。

「勇気はこう言うのだ。『これが生だったのか。よし。もう一度』と。」(「ツァラトゥストラ」『幻影と謎』)

たとえ過去がどんなに望ましくないものであり，醜悪なものであろうと，それを直視して「よし。もう一度」と言い切れる存在が「超人」である。このたいどは「永遠回帰」に対して極めて実存的倫理的に立ち向うものである。

三．肯定的「永遠回帰」

ニヒリズムとしての「永遠回帰」は以上見てきた如く，まず「意志」が「過去」にさかのぼって意欲し，過去を救済することによって克服されることが明らかとなった。一切が，現在の一瞬一瞬が永遠に回帰するという思想に対して，われわれは後悔が残らないように現在の一瞬一瞬，すべての生起に対して「それはわたしが欲したのである」と未来において過去をふり返る時言いきれるように現在のすべてのことに最善を尽すことが要請されるのである。

さて終りに，「永遠回帰」の肯定面，すなわち存在論的に現象するある種の理想的次元のことを問題として考察を加えてみよう。

「一切は行き，一切は帰る。存在の車輪は永遠にまわっている。一切は死んでゆく，一切はふたたび花咲く。存在の年は永遠にめぐっている。一切はこわれ，一切は新たにつぎ合わされる。存在という同一の家は永遠に再建される。一切は別れあい，一切はふたたび会う。存在の円環は，永遠に忠実におのれのありかたをまもっている。

一瞬一瞬に存在は始まる。それぞれの『ここ』を中心として『かなた』の球はまわっている。中心は至るところにある。永遠の歩む道は曲線である。」(「ツァラトゥストラ」『快癒しつつあるもの』)

この言説にニヒリズムのひびきはない。それは一つの高みに到達した悟りの境地を示している。これは「肯定的永遠回帰」とでも言いうるような次元のものである。

「見よ，われわれはあなたの教えることを知っている。それは，万物は永久に回帰し，われわれ自身もそれとともに回帰するということだ。また，われわれはすでに無限の度数現存していたのであり，万物もわれわれとともに無限の度数現存していたということだ。

あなたは教える。生成の循環が行なわれる巨大な年というものが存在することを。その年は，砂時計のようにいつもくりかえして新たにさかしまにされ，このようにして，すべてはくりかえして新たに行なわれ，過ぎてゆくのだ。——だから，めぐり来るこれらの年々はつねに最大のことにおいても最小のことにおいても，あいひとしい。だからわれわれ自身も，この大いなる年を幾度かさねても，われわれ自身にひとしい存在なのだ，最大のことにおいても最小のことにおいても。……だからわたしはふたたびいつさいの事物の永劫の回帰を教えるのだ。——だからわたしはふたたび地と人間との大いなる正午について語り，ふたたび人間たちに超人を告知するのだ。」(「ツァラトゥストラ」『快癒しつつある者』)

この言説では等しきものの「永遠回帰」という思想が肯定的に淡淡と語られている。無気味な身震いするような言説ではない。ここではニヒリズムとしての「永遠回帰」を克服し，肯定的な「永遠回帰」を迎える「超人」が告知されている。

「われわれがたった一つの瞬間を肯定するとすれば，われわれは，それによって，自分自身のみならず，すべての現存在を肯定したことになる。なぜなら，孤立してあるものは，われわれ自身のうちにも，事物のうちにもないからだ。われわれの魂が，たった一回でも，幸福のあまり絃のようにうちふるえ，音をたてたとしても，このたった一つの生起を条件ずける

ために，全永遠が必要であったのであり――また，全永遠は，われわれの肯定のこのたった一つの瞬間において，認可され，救済され，是認され肯定されたのである。」（「権力への意志」1032番）

この言説では，一瞬間と全永遠とがおたがいに関連し合っているということ，従って，われわれは一瞬間を大事にして最善の生き方をするのでなければならない，ということを示している。

ここで「永遠回帰」という概念を少し分析して考えてみよう。「回帰」というのは等しきもの一切が帰り来っては現象するということである。「永遠」というのは時間を表す概念で生起が一回的に起るのでなく，無数度，無限に起ることを意味している。従ってニヒリズムとしての「永遠回帰」においては，望ましくもないもの，醜悪なものが一度だけ生起するならまだ耐えられようが，「永遠」に繰り返し現象するというのでは，この「永遠」は極めて呪うべきものであろう。このような時間を歓迎するものはいないであろう。しかし「永遠」が，一瞬間との関連の中で，一瞬間が最善に生きられ，われわれの意志によって強く左右されるものであり肯定され是認されるものであるときには，この「永遠」もまた是認され肯定されるのである。このような「永遠」は人間にとって歓迎されるものとなり，さらには大きな憧れともなるであろう。ニーチェは「ツァラトゥストラ」の『七つの封印』の中で次のように語っている。

「わたしはまだわたしの子を生ませたいと思う女を見いだしたことがない。しかしただ一人ここに，わたしの愛する女がいる，おお，おまえにわたしの子を生ませたい，わたしはおまえを愛しているから，おお，永遠よ。わたしはおまえを愛しているのだ，おお，永遠よ。」

この言説の中でニーチェの愛の対象となった「永遠」にはニヒリズムの暗さの影すらない。それは明るい正午の晴朗さを示している。ニーチェはニヒリズムから出発して万物「肯定」への道を歩む。

「……私が生きているような実験哲学は，もっとも原則的なニヒリズムの可能性さえ試みに先取りする。しかし，それは，この哲学が否定，否，否定への意志にとどまるということではない。むしろ，この哲学は逆のところにまで突き抜けようと欲する——つまり，それは，あるがままの世界にたいして，差し引いたり，除外したり，取捨したりすることなく，ディオニュソス的に肯定するところまで進むことを欲する。——それは永遠の円環を欲する——同一の事物，結合の同一の論理および非論理を欲する。哲学者が達しうる最高の状態。それは，生存にたいしてディオニュソス的な態度をとることだ——これをおらわす私の公式が運命愛だ。」（「権力への意志」1041番）

万物にたいして，それらがあるがままに絶対的に肯定すること，このような「然り」をいうものは誰か？　無垢な一切肯定をなすものは誰か？この問に対する解答をニーチェは「ツァラトゥストラ」の『三様の変化』の最後に挙げている。

「しかし思え，わたしの兄弟たちよ。獅子さえ行なうことができなかったのに，小児の身で行なうことができるものがある。それは何であろう。なぜ強奪する獅子が，さらに小児にならなければならないのだろう。

小児は無垢である。忘却である。新しい開始，遊戯，おのれの力で回る車輪，始原の運動，『然り』という聖なる発語である。

そうだ，わたしの兄弟たちよ。創造という遊戯のためには，『然り』という聖なる発語が必要である。そのとき精神はおのれの意欲を意欲する。世界を離れて，おのれの世界を獲得する。」

この言説で語られている「精神の三様の変化」というのはすでに多く論じられている有名な箇所なのである。即ち駱駝に発せられる「汝なすべし」という命題から，「我欲す」という獅子の自由，さらに「我は在り」という小児の無垢な遊戯する世界への三段階の発展のことである。小児は

遊戯しながら「善悪の彼岸」において一切を肯定しかつまた世界を創造する。ここにはキリスト教道徳の魔力もおよばない。さて世界をディオニュソス的に肯定するということはいかなることなのか？　この問の解答はニーチェの初期の代表的な作品「悲劇の誕生」の検討によるのでなければならない。ここではその詳細を論ずる余裕はない。しかし結論的に言えば，ディオニュソス的魔術にかかると，醜悪なもの，嘔気をもよおすもの，小人や末人や学者や王様や聖者やらといった個別的な存在を支える個体化の原理は粉砕され，万物は世界の根源的一者と神祕的に一体化し，これに基づいて人間と人間とはその始原の深淵において結合され，敵対関係にあった人間と自然とは和解し合うのである。このとき生は神化され躍動する。万物は陶酔の絶頂において救済される。生成の過程から罪や罰は存在しえないものとなり，そのまま全生存，全生起，全生成が肯定されるのである。これは小児の「然り」という聖なる発語と共通する万物肯定の思想なのである。

おわりに

ニーチェ思想の中で極めて重要な問題となっている「永遠回帰」とは何なのかということを問題意識としてこの論文を書いてきた。ニヒリズムとしてのペシミスティックな「永遠回帰」と肯定的な一つの安心立命の境地としての「永遠回帰」という二面性をもつ「永遠回帰」を統一的に把握しようという意図をもって論をすすめてきた。そしてまずニヒリズムとしての「永遠回帰」の克服はいかにして可能かという問いから出発して，意志の在り方を問題化し，「われ欲す」という自由な意志ですらどうすることもできない「過去」という障害物が，ニヒリズムの度合いを決定的に高めていることをみて，まずこの「過去」の救済ということを考察してみた。それは過去の生起を「それをわたしは欲したのである」と言うことによっ

て救済したのである。そしてこの意志の飛躍的在り方は，単に過去を救済するのみでなく，「永遠」へと通ずる現在の一瞬一瞬への対応の仕方にまで至って，未来を創造的に意欲するものとなった。この態度から世界一般，生成の全過程に対する対応の仕方が追求されるものとなって，世界をディオニュソス的に肯定するという究極的な解放思想が明らかになった。そしてこの姿勢は小児の無垢な聖なる「然り」という発語と同一次元のものであることを確認してこの論を終えることにしよう。

「注」 本論中の引用文のテキストにはクレーナー・ポケット版を使用した。なお引用文の訳文は理想社「ニーチェ全集」の第十一巻，第十二巻「権力への意志」原佑訳，第八巻「悦ばしき知識」信太正三訳，「ツァラトゥストラ」中公文庫，手塚富雄訳，および山崎庸佑著「ニーチェ」講談社，を原則として使用した。

（6月10日受理）

Nietzsche und die ewige Wiederkehr

INOKAWA Kiyoshi

Die ewige Wiederkehr von Nietzsche hat zwei verschiedene Seiten. Die ewige Wiederkehr wird einerseits von Nietzsche als die extremste Form des Nihilismus gedacht. Aber sie wird uns andererseits als etwas Positives, der unerschütterliche Seelenfriede dargestellt. Kann dieser Widerspruch aufgehoben werden? Ist eine einheitliche Auslegung möglich? In diesem Aufsatz versuche ich füt das obige Problem eine Antwort zu geben.